

やまたらけ

YAMADARAKE

A P R I L

No. 40

2010

は や か わ で ざ い ん ぶ つ く HAYAKAWA DESIGN BOOK

「デザイン」という言葉は多義的で様々な解釈ができますが、今日では、カッコいい、あるいはかわいいうプロダクトをデザイナーが生み出し、魅力的な広告を打つ、といった「デザイン」が一般的かもしれません。しかしながら本来、生活に必要なものを作ったり、メンテナンスをしたりといったことは、誰もが生きるために必要としてきたことでした。自分の手から離れたデザインを多く目にする今、生活に根ざしたデザインに目を向け直すと面白い発見があるかもしれません。

民俗学者・宮本常一は著書『民俗学への道』の中で、環境と生活の密接なつながりについて言及しています。それを踏まえて考えると、人と自然のせめぎ合いがすぐそこに見える暮らしの中には、自然と調和したり、調和したり、対峙したりといった様々な知恵や技術や工夫が潜んでいると考えられます。

急峻な山、豊富な水、多様な動植物―。早川町には、驚くほど豊かな自然があり、そこでは暮らしのことは自分の力でなんでもこなす人々が生活しています。「身の回りのことは自分でできるのがいい」という価値観に支えられた早川町での暮らしの中には、経験に裏打ちされた様々な知恵や技術や工夫が潜んでおり、そこには生活に根ざしたデザインがあるはずです。生活に近いデザインは「人に近い」デザインでもあり、その「形」や「仕組み」には、独特の温かさが宿っています。もしかすると、私たちの暮らしにも応用可能なエッセンスが隠されているかもしれません。

さあ、早川町ならではの「形」や「仕組み」を見つける探検隊となった編集部と一緒に、デザイン散策に繰り出しましょう！（跡部高幸・並木義和）

大工のこだわりが凝縮された 新倉の川口邸



場所は新倉集落。往時のにぎわいを肌を感じながら歩を進めると、ひときわ目立つ木造の建築物が目に入る。見事な曲線美をあしらった手すりに、磨りガラスを施した飾り窓、玄関まわりのアプローチ：と、見れば見るほどデザインの質の高さに驚かされる。

現在この家には、元教員で自然愛好家の川口仁さんがお住まいだ。元々は、彼のおばさんと旦那さんの新居として建てられたという。この辺りは当時河川敷だったが、水田に転用され、その後耕地を整理した際タイミングよく土地が生まれ、家が建てられる事になった。昭和2年から3年かけて造られ、完成した昭和5年に川口さんが生まれた。

家を実際に建てたのは、新倉出身の望月文作と大原野出身の石川浜次郎の2名の大工だ。彼らは施主の意見から図面を起こし、全体のバランス等を計算して設計にあたっていたという。当時は平屋が主流だったが、大工の腕の見せ所とも言うべき二階建てに挑戦していることから、狭い土地に建て

るための技術も持ち合わせていたようだ。手すりや飾り窓、細やかなデザインが施された戸袋など、見れば見るほどその奥深さに触れることができる。製材も動力もない時代に、見えないうちでも手を抜かない職人魂の一端が垣間見える建物である。



こだわり①「戸袋のデザイン」

家の周囲に付けられている雨戸の戸袋は全部で4つあるが、そのどれもが異なる意匠でつくられており、見栄えを意識して雨戸が一ヶ所に集まるようにしている。



こだわり②「手摺の切り出し」

見事な曲線を描く手すりも手造りだ。各部材が交互に表と裏に位置を変えて配置されている。解説しているのが、川口さん。

こだわり③「磨りガラスの飾り窓」

分度器も無かった時代に、その場で計算して割り出しつくられた。当時、磨りガラスは高価であったが、家の中にも磨りガラスを使った飾り窓がある（写真右）。



こだわり④「玄関前のレンガ」

玄関前の地面は元々コンクリートで固められていたが、後にレンガを敷き詰めた。一段低い部分は、木製で「すのこ」のような作りになっている。アールの効いたレンガと木の組み合わせは、いかにも人を誘い込んでいるかのような趣だ。



植物を活かした空間デザイン 薬袋・米沢邸のアケビ棚ほか

早川町では、玄関前や庭に藤、アケビ、キウイフルーツなどの蔓性植物、また松などを植えて、木漏れ日が美しいゲートやパーゴラに仕立てた家が数多く見られる。

薬袋の米沢さん宅では、アケビとウベ（ムベ）の蔓で覆われた棚が迎えてくれる。しかし、実はこれは植えた物ではない。子どもに伝書鳩をせがまれ鳥小屋を置いたあと、鳥が種を運び育ったものだそう。蔓が長く伸びてきた頃に棚をつくり、今では毎年春には綺麗な花が咲き、秋には美味しい実を成らせ楽しませてくれる。

ただ、手入れはなかなか大変。特に夏場はとてつもない速さで伸びるので、その都度剪定しているという。今となってはすぐ

側にある柿の木を覆い尽くすほどに蔓が絡まり、全体的に棚が重くなってきたので、パイプを間に通して補強したりもしているようだ。

自然を良く知る早川町民だからこそ可能な、植物を利用した暮らしのデザイン。そこには、五感を使って楽しめ、身体と心を癒してくれる空間がある。



▲米沢邸



写真左は新倉で発見した庭。植物の棚を作り、下に椅子を置いて自らが楽しめる空間をつくっている。写真右は馬場の望月邸。松の枝を伸ばし続けて門にしている。訪問客を眼でも楽しませてくれる。植物の性質を良く知る早川人ならではのデザインだ。

お寺とステンドグラスの異色コラボ 黒桂・宝竜寺の色ガラス

お寺にしては珍しい着色ガラスが施されているのが、宝竜寺の玄関だ。入り口の戸の木枠に、緑と赤のガラスが左右対称にはめ込まれている。2色のコントラストが、可愛らしい雰囲気を出している。

このガラス、40〜50年前前に、当時の檀家総代さんたちが入れたという。なぜお寺にこのような色ガラスが使われたのか、当時の事を詳しく知る人が見つからずはつきりとした理由はわからなかったが、それにしてもなかなかにお洒落な色使いである。

ちなみに、表紙の写真は建物の中から見た様子。透明のガラスにも模様が入っていて、ガラス選びのセンスの良さが伺える。



斜面地特有の暮らしのデザイン 新倉のぐにやぐにや階段と 草塩の突き出す階段

新倉集落の中ほどに、文字通りぐにやぐにやした階段がある(写真左)。集落の地盤が粘板岩層でもういため、町の年次計画において危険箇所指定され擁壁が造られた。この階段は、そのときにできたものだそうだ。

しかし、この階段、登っても左手に柚子の木があるだけで、特に行き先があるわけでもない。ではなぜ、この階段があるのだろうか。その理由は定かではないが、一説によると、擁壁を作る以前、この辺りには畑と、畑へ通じる道があり、工事後もそこを通れるようにと住民が要望してできたのではないかと、という。さらに、一連の工事は町が実施したため、要望が反映されるなど融通は利いたが、金銭的負担を減らすよう簡単な工法で造ったため、ぐにやぐにやになったのではないかと推測される。



一見すると階段なのかも知れないが、実際はちゃんと登れるようになっている。デザインはまるでアントニオ・ガウディ!?。しかし、非常に登りにくい(笑)。新倉には、他にも面白い階段がある。下の写真もその一例。



また、草塩集落にも不思議な階段がある(写真右)。民宿「萩」の裏手にある階段は、よく見ると一枚石が段々になって壁面から突き出ており、その上を登れるようになっていいる。石を積む際に、上の段へ登り易いようにしておきたいという心理が働いたのだろう。やまだらけの早川町。斜面地に暮らす町民の生活の知恵と技の一端を、階段のデザインからも垣間見る事ができた。

モダンなディテール 赤沢の火の見櫓

赤沢集落で、デザイン性の高い火の見櫓に出会った。火の見櫓は、主に消防団が火事などの際に鐘を鳴らし、その鐘の鳴らし方で住民へ様々な合図を送るためのものである。赤沢の櫓は以前は木製だったが、いつしか鉄製となり、その後何度か塗り直され維持して来たという。櫓の階段の上の台には、風見鳥のような矢と小さな屋根がある。屋根にはかつて半鐘が吊されていたが、現在はスピーカーとマイクが取り付けられている。さて、ここで注目したいのが、櫓を支



子どもの間で登っては柱を滑り降りる遊びが流行ったが、見つかったと怒られたらしい。

えている2本の柱の先端のデザインである。先端は円錐形に尖っており、柱と柱に曲線でデザインされた台座が渡され矢を支えている。日本の火の見櫓なのに、どこかアールヌーボー調。いつ誰がデザインしたのかは、残念ながら分からなかったが、当時この辺りにも西洋の様式美に見識のある設計者がいたことが伺える火の見櫓である。



穴をあけたのは誰？
京ヶ島八幡神社の壁面

町内を巡っていると、所々穴のあいた家やお堂が見られる。京ヶ島の八幡日吉神社の左手のお堂壁面にも、無数の穴が開けられている。しかもこの穴は、板と板の間にまるでそろばんの玉のようにきれいに並んでいる。もしかして、何かの暗号か？

そんな編集部は、犯人を聞いて驚いた。穴をあけたのは、なんとキツツキだったのだ。集落の住民にとってはなじみ深く、50年以上も昔からずっとあのような状態だという。というのも、何度直してもすぐに穴を開けられてしまうので、仕方なく諦めたのだとか。今ではほとんど聞かれなくなつたそうだが、当時は昼間でも「トントン」と音がして、見に行くと下に木くずがたまっていたそう。

穴が無数に、でも行儀良く並ぶ壁を眺めていると、とても鳥の為せる技とは思えない。きつと板の継ぎ目が柔らかく、穴を開けやすかつたのだろう。これも、鳥の暮らしの必然がもたらしたデザインと考えると面白い。

この神社の境内には、山梨県の天然記念物で樹齢 800 年を超えるといわれる「京ヶ島の夫婦杉」もあり、厳かな雰囲気漂う。

豪華賞品？が当たる やまだらけクイズ！18

問：今回の取材中にとある畑で発見した右のタイヤ。いったい何のために置かれているのでしょうか？



- 答 1, 鳥を脅かすカカシ
 2, 大人用のだるま落とし
 3, UFO と交信するアンテナ

正解者の中から抽選で3名様に、山菜をプレゼントします！内容は届いてからのお楽しみ。

前回のクイズの正解は、2の「標高が高く気温が低いから」でした。抽選の結果、桐戸雅光さん（身延町）、佐野ひとみさん（南部町）、道丸摩耶さん（千代田区）の3名が当選しました。おめでとうございます！

早川旬の直送便

年に一度の山からの恵み
**「もちろん全て早川産！
 山菜の詰め合わせ」**

春を告げる食べ物と言えば、そう、おいしい山菜ですね。一年でこの季節にしか食べられない山菜です。しかも、自然豊かなここ早川町産の山菜です！ぜひ味わってください！

料金／通常 2000 円・会員 1800 円＋送料 950 円
 内容／500g 以上 ※たらの芽、コシアブラ、コゴミ、ウド、ワラビ、タカノツメ、フキ等の中から時期のもの3～4種類を詰め合わせ
 発送／4月下旬以降、注文順に発送
 締切／4月26日（月）



写真はイメージです。



雨畑茶とポポの早川産デザート！ **「雨畑茶アイスとポポアイスの詰め合わせ」**

雨畑地区は霧が降りる土地柄、おいしいお茶が採れます。その成分たっぷりの健康でおいしい雨畑茶アイスと、幻の果物！マンゴーとバナナを合わせたような味がする、マイルドで甘くておいしいポポアイスを、あなたの元へお届けします。期待を裏切らないこのアイスをこの機会にどうぞ、ご賞味ください。

価格／通常 1,800 円・会員 1,620 円＋送料 950 円
 内容／雨畑茶アイス 120ml×3個＋ポポアイス 120ml×3個
 発送／注文順に順次発送 締切／通年、受け付けます

■注文・お問い合わせ先

「NPO法人 日本上流文化圏研究所（やまだらけ編集部）」

電話 /0556-45-2160 (9:00～17:30) ファックス /0556-45-2268 (24 時間対応) メール /shop@joryuken.net (24 時間対応)

いずれも、注文者氏名、住所、電話番号、お送り先氏名、住所、電話番号、商品名、数量をご連絡下さい。ファックス、メールでお申込の場合、折り返しご連絡いたします。3日経っても連絡がない場合は、お手数ですが電話でお問合せください。支払い、商品と一緒に請求書をお送りしますので、指定の金融機関へお振込みください。

※会員とは、早川サポーターズクラブ、及びNPO法人日本上流文化圏研究所の会員のことです。

早川町湯島く足馴峠く出頂の茶屋 く富士川町(旧・増穂町)小室 足馴峠(あしならしとうげ)

西山地区の下湯島と上湯島の間で東の方を見ると、山の斜面が比較的なだらかに、しかし結構遠くまで続いている。かつて、湯島村の人々が増穂や鵜沢まで行くために越えていった山(実際は、見えている稜線のもう一つ奥たが)である。

湯島の人々が使っていたのは足馴峠という峠で、大正11年7月に南アルプス登山に訪れた朝香宮鳩彦に命名される前は、大峠と呼ばれていた。標高1820mの足馴峠は、早川流域の峠の中でも最も標高が高く、そのために大峠と呼ばれてきたのだろう。

昭和33年に出版された『西山村総合

調査報告書』には、峠道が利用されていた頃の聞き書きが載っている。それによると、足馴峠と出頂の茶屋には昭和のはじめまでお茶屋さんがあったそうだ。湯島の人々は木炭・キハダ(薬用植物)・藁・下駄材などを出して、鵜沢で菓子・塩・麦・油・魚・米などを買ったという。12貫目くらいというから、45kgくらいの荷を背負ったこととなる。

また、西山温泉への湯治客も、トロツコ軌道などが整備される前は足馴峠を越えてやってきた。明治時代に書かれた『甲斐の落葉』によると、強力は、背負子に5升樽をくり付け布団をかぶせ、その上に客を座らせて峠道を登ったという。著者の山中共古は、籠などより快適な乗り心地だと書いている。人の背に負ふさつて、はるばる峠を越えてたどり着いた西山温泉は、まさに秘湯、別天地のように感じられたに違いない。(柴田彩子)

※峠道は今回で最終回となります。



峠付近の様子。撮影したのは、2000年頃。すでに道は荒廃しており、峠の正確な位置は特定できなかった。



静岡新報社主催で、山梨・静岡の名勝を投票で山名に選んだ際、西山の名勝に選ばれた。甲斐の湯島温泉を記念して、和3年(1868)に建立されたオベリスクを見ることが出来る。



※現在、峠道は整備されておらず、通行できません。また、旧増穂町と旧鵜沢町は、現在は合併し富士川町となっています。

山中共古の描いた峠越えの様子。強力に背負われる湯治客。『西山村誌』より

読者の声

- 飽食の時代を生きる私たちにとって、山の恵みを昔ながらの方法で保存する早川の人々の知恵と技が新鮮に感じるのは、何とも皮肉なものです。(中略)興味深く読ませていただきました。(浜松市Yさん)
 - 料理が参考になりました。先日届いた乾物(※物産会員の方々に送られる旬の定期便のこと)で、お寿司と卵入り巾着をさっそく作ってみようと思います。(中央市Iさん)
- 編集部:「時は金なり」といいますが、時間を惜しむのではなく、時間をかける事が価値を生む時代が来ているのだと感じています。お金では買うことができない、手間ひまかけた早川の味は、いかがでしたでしょうか?
- 早川の薬草、利用法、薬草茶の作り方、(中

- 略)食べられる草の紹介(をしてほしい)。(南部町Sさん)
- 編集部:乾物の取材中に、薬草の話もちろはら出てきて大変興味深かったです。前号で取り上げる事はできませんでしたが、こちらも早川の貴重な文化として、いつか必ずご紹介します。お楽しみに!
- いいガイドブックができましたね。作った方々に拍手を送ります。(「めたきけし」は「めた聞けし」ですね。「はんでめためたごちよでござい」が早川の方言でしたね。(福島県Mさん)
- 編集部:町民からも、「めたきけしってなんでえ〜。」と聞かれる事が結構あります。分かって頂いたようで、こちらも安心です。

■NEXT やまだらけ

41号特集(6月上旬お届け)

「栃原堰堤と早川の砂防」

昨年末、早川町内にある栃原堰堤が、有形文化財に登録されたというニュースを耳にした編集部。でも栃原堰堤って何?恥ずかしながら、編集部も一人として知らなかったのです。

そこで、早速調査開始。その結果、この堰堤は春木川中流にあり、七面山からの土石流をせき止めるために、当時の内務省が昭和の始めに造った歴史ある堰堤だということ分かりました。

次号では、文化財の仲間入りを果たしたこの栃原堰堤にスポットを当てながら、早川と砂防の歴史について紹介したいと思います。お楽しみに!

「早川デザインブック」ってお題なんですけど、何を書いたらいいでしょうか?と真っ正直に早川町民と一緒に悩みました。道中のご協力には本当に感謝しています。紙面に載らなかったネタにもキラリと光るものが多く、40号にして原点回帰のフィールドワークは新しい発見の連続でした。自分セレクトの「デザインブック」をつくるのも楽しいかも!?と思っています。

山を覗けば宝の山
【やまだらけ】

発行元/フィールドミュージアム運営委員会
住所/山梨県南巨摩郡早川町薬袋430 〒409-2727
電話/0556-45-2160 ファクシミリ/0556-45-2268
ホームページ/http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/fm/